

新年を迎えて

開倫塾
塾長 林明夫

『新しい年になりましておめでとうございます。時代もいろいろ変貌いたしておりますけれども、大事なことは、やはり、一人ひとりの人間が、いかに生きがいをもって生きるか、その基本を育てていくということだと思えます。

特に、学生さんにとっては、自分の能力をいかに開発していくかという努力と、それを考える人生の基盤というようなものが大事なことでないかと思うのであります。

私は栃木県生まれでありまして、少し年をとりますと昔のことを思い出すのですが、小学校1年から4年の2学期ぐらいまではいなかで育ちました。学校から帰ってくると、おじいさんやおばあさんに、手伝いをせいということで、押し切りといいまして、馬のエサを藁を切ってつくる仕事の手伝いをさせられたことを覚えています。小さい子には、押し切りで切るのは少々危険でもあり、そしてまた力の要る仕事でしたが、とてもなつかしい思いをしています。また時々、おばあさんに言われて、そば踏みさせられたことを覚えています。昔は、いなかは、そばを買うなどということはいたしませんでしたし、味噌も醤油も自分のところで、つくりました。こねたそばをゴザにくるんで、上から小さい子が踏んで、20分位踏まされたでしょうか、いやで途中で逃げたくなったこともありましたけれども、今、そのことがとっても大事なことのような気がするんですね。

今のことばで言えばお手伝いということになるのでしょうけれども、何か、お手伝いということよりも、もっと違った意味で生きていた世界であったような気がするのです。

小さな手と、小さな足で、何ができていたのか、あるいは小さな手で、小さな足で、できていることが、能力を開発する基本だと思えます。何ができるのかという可能性の追求よりも、今何をしているのかという体験を基盤とすることが大切ではないかという感じがしてならないのです。

潜在意識を、あるいは潜在能力を育てるという戦後の教育に対する一つの流れがございます。それも非常に大切な個性教育ということにあてはまることだと思えますけれども、何かそれよりももっと大切なことは、体験の意識を育てる、あるいは体験を基盤にして人間を育成することの方が、長い人類の歴史から見れば大事な人間育成の基盤ではないかなという気がしてならないのです。

カウンセラーの先生方が、一つの問題を御親切に検討して、「こんなところがこの子の性格をゆがめているのではないか」、あるいは「こんなことがこの子を伸ばし切れない一つの小さなできごとではあるけれども、心のかげりになっているのではないか」ということを、おっしゃること

があります。これも、その子の引きずっている家庭環境というもの、あるいは、それなりの人生経験というものもあるわけで、大切なことであるわけですが、実際から言いますと、本当にどれが原因かなんていうことは、本人もわかっておりませんし、そして、それをお調べ下さる先生も本当のことなんてわからないと思うのです。ですから、そのときに問題になったことだけを、誇大視して針小棒大といいますか、そこから人間を解決しようとしていくのは、その人間の問題ではなくて、むしろ、そのカウンセラーの学問の対象としての人間ではないか、その辺に、一つの限界があるような気がするのです。

もっと大事なことは、基本からやり直すということ、今何ができているのか、小さな手で小さな足で社会人として、家庭人として、あるいは一人の人間として確実に生きているその体験から何を学んでいるのか。小さいときには、わからないだろうけれども、実はそれが長い人生を支える一番大事な基盤づくりではないかなという感じがするのです。

時々、いろいろな問題をもって御相談に来られるお子さん連れのお母さんもありますが、私はそういうときに、原因はきかないことにしています。朝何時に起きていますかときくと、学校に行かない子が8時ということがあります。学校に行けなくなったことは、学校の子どもとしては一つの大きな問題でしょうけれども、人間としてどこからやり直すのか。7時に起きて学校に行っていたならば、6時半に起きてみて、そこでお手伝いをして、学校に行かない期間だって立派に人間として生きる基盤をつくっていけば、私はおのずから、いろいろな問題を乗り越えて仲間と参加をして、明るく、学生生活あるいは青春というものをつくり、人生を生きがいのある、確信のある生き方につくり変えていくことができるのではないかと思います。

年の始めでありますので、そういう意味で「何をするか」ではなくて「何が今できているのか」あるいは「何をしているのか」といういつでも体験の上に立って学んでいくということが人間教育として一番大事な基礎づくりではないかと思えます。

栃木県の皆さん、私もいなかで育ちまして押し切りをつくって馬のエサをつくったり、ソバを踏んだことが一番大事な自分の基礎になっているような気がいたします。足もとをしっかりとしたい一年のはじまりでありたいと思います。』

*ラジオ栃木放送 1月19日(土)午後3時30分すぎから放送予定の「開倫塾の時間」での京都・山科・一燈園・石川洋先生のお話しの速記録。(文責・林明夫)

1. 「今何ができているか」あるいは「今何をしているのか」が最も大切であるという石川洋先生のお話には感銘深いものがありました。原因をさぐり反省はせねばなりません、今までのことは、余り言っても仕方のないことです。新年ですので今年からどうしよう、今からどうしようと、ものごとを新たに考え直し、今までの自分にとらわれない生き方、自分の理想とする生き方により近い生き方をしていただきたいと思います。
2. ただ学生としての生き方にはおのずから制約があります。「勉強をすること」「身体を鍛えること」「心をよりよくすること」は必ず行って下さい。受験生であるからには、一定レベル以上の基礎知識を身につけて希望校に進学することは、あたり前のことです。そのためには、今まで教わってきたことを完全に理解しつくした上、それを答案の上に、制限時間以内に表現しつくさねばなりません。大学入試や高校入試を受けるだけの学力を身につけることは、受験生のこれからの人生に多大の

貢献をします。何しろ、読み書きができ、計算ができ、英語がわかり、自然科学、社会科学の基礎的な素養があることを意味するのですから。職業選択の幅が大きく広がるばかりでなく、様々な活動が自らの責任で自由にできる基礎が提供されるからです。どうか受験勉強を「被害者意識」で行うのではなく、今まで勉強してきたもののうち不確かであったものを確実にし、完全に理解してから上級の学校に進み、更に勉強を深めると積極的にとらえて下さい。この勉強を機会に、自分なりの勉強の仕方(スタディ・スタイル)も少しずつつくって下さい。「素直な心」と、「長時間勉強をしても大丈夫なだけの体力」と、「明確な目的意識」さえあれば、必ず道は開けます。

開倫塾の先生方は皆さんが勉強のうえで成果があがるよう全力をあげて応援いたしますので、最後までがんばってついてきてください。

何十年かたって、高校や大学入試のときにはよく勉強したな、あの勉強が自分の基礎をつくった、とふりかえられるくらい、是非がんばっていただきたく思います。